

# シェアハウス「ひふみ荘」の10年

正会員 ○ 北 雄介\*

\* 長岡造形大学 造形学部建築・環境デザイン学科 助教・博士(工学)

# Ten Years of Shared House "Hifumi-So"

○ KITA Yusuke\*

\* Assistant Prof., Nagaoka Institute of Design, Dr. Eng.

## 1. はじめに

本稿では筆者自身が企画し、10年間運営してきた（そのうち4年半は居住もした）シェアハウス「ひふみ荘」の歩みを、一人称研究的な視点で簡単に振り返る。建築的な工夫には乏しく、取り立ててコンセプトもないシェアハウスではあるが、それでも10年の間に構築された人脈や風土には目を見張るものがあり、人間と場所との関係について考えさせられるプロジェクトとなった。

## 2. ひふみ荘の概要

### 2.1. 建物と改装

物件は京都市右京区西院の住宅街にある。現在築50年ほどになる木造家屋で、元々1階にはファミリーが居住し、2階は学生寮として使われていた。筆者がこの物件を不動産屋で見つけて借り受け、2009年の3月にシェアハウスとしてスタートさせた。2階は6部屋がきれいに振り分けのかたちになっており、シェアハウスとして理想的な間取りである（図1）。したがって大規模な改装は、初年度に脱衣所を設置したのと2階の床を抜いて内階段を設けた程度で済んだ。

### 2.2. ルール

金銭のトラブルだけは避けるため、最初にルールを定めた。できるだけ公平感のある仕組みをつくるように努めた。家賃、水道光熱費、食費や雑費まで、基本的に毎月の「割り勘」とした上で、外食が多い人や長期間家を空ける人にはその負担割合を随時変更するなどした。初期の住人と後から入る住人の間にも、金銭や労力の負担が偏らないようにした。運営者である筆者自身も、居住中は同じルールに従った（2013年11月に退去し運営に徹するようになって以降は、共用口座から毎月一定の運営費を受け取った）。結果的に、金銭面での不満はほぼ出なかった。

金銭以外のルールとしては、週替わりの掃除当番を設けたことと、月1回の定例ミーティングをもったことがある。ミーティングでは表1のような項目について意見を出し合い、住人が自発的に運営にかかわれるよう促した。

### 2.3. 住人

10年間で35名（男性16名、女性19名。工房のみの利用者、東日本大震災による一時避難者を含む）が、この家に暮らした。平均年齢は30代前半程度だと思われる。学生（入居当時）が11名を占め、フリーターや自営業者なども多く、正社員は相対的に少ない。多様性を確保することなどを狙いとして、住人の大半はインターネットの掲示板やSNSを使って募集した。生活態度や経済状況などの面で望ましくない人が入るリスクがあるが、内見時に行なう丁寧な面談が、家に合う人を見極めるフィルターとなった。

## 3. 10年間に起こったこと

### 3.1. ゆるやかな人間関係の蓄積

理想的シェアハウス像としてイメージされるであろう「毎晩みんなで食卓を囲んで乾杯」というシーンは、ひふみ荘では多くはない。職業も年齢も生活スタイルも異なる住人は、個々が独立した生活を送りながら、たまたま時間が合えば食事を共にするという程度で、互いにあまり深入りはしない（写真1）。しかし仲はよく、住人間のトラブルは幸いにもほとんどない（筆者の把握する限り、10年間で2件程度）。掃除や食品管理など細やかな気遣いのできる第二の管理人的な住人や、イベントを開くのが得意な住人が現われるなど、自然な役割分担も生じた。

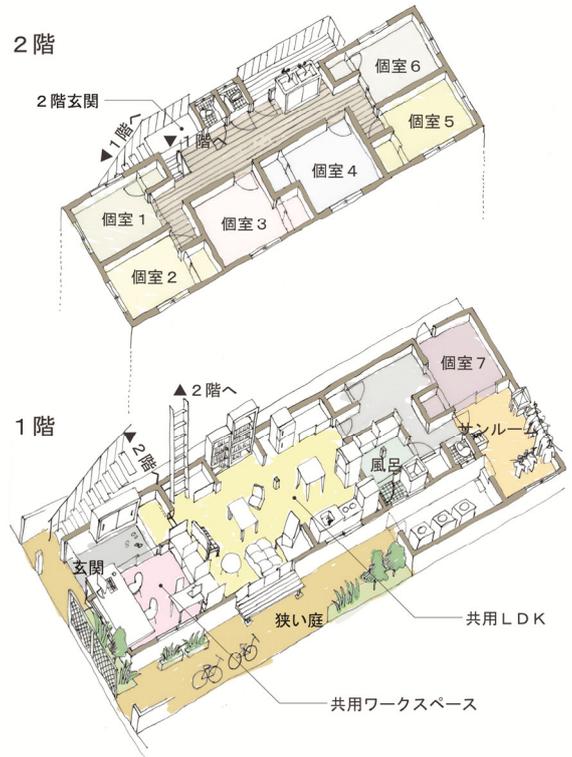


図1 ひふみ荘の間取り図

表1 ミーティングでの議題の例

金銭関係	<ul style="list-style-type: none"><li>1ヶ月の精算（家賃、水道光熱費、食費、雑費、共用口座の収支）</li><li>金銭ルールの更新、確認</li></ul>
生活向上	<ul style="list-style-type: none"><li>改装や大型家具の購入</li><li>掃除の当番やルールの確認</li><li>緊急連絡先リストの作成</li><li>猫を飼うことの検討（実現はせず）</li></ul>
イベント	<ul style="list-style-type: none"><li>パーティや旅行の企画</li><li>物件オーナーへの挨拶</li></ul>
入退居	<ul style="list-style-type: none"><li>居住中の住人の退居スケジュール</li><li>新規入居者の募集方法、進捗確認</li></ul>



写真1 リビングでの日常の風景

所在地：京都府京都市右京区  
主な用途：シェアハウス  
敷地面積：146 m<sup>2</sup>  
建築面積：68 m<sup>2</sup>  
延床面積：133 m<sup>2</sup>  
キーワード：シェアハウス・運営・場所

Location : Ukyo-ku, Kyoto-shi, Kyoto  
Main Use : Shared House  
Site Area : 146 m<sup>2</sup>  
Building Floor Area : 68 m<sup>2</sup>  
Total Floor Area : 133 m<sup>2</sup>  
Keywords : Shared House, Management, Place

誕生日やクリスマスなどの機会にはパーティを行なった（写真2）。その際には住人の友人や近隣住民も招き、いずれ常連になるような人もいて、人の輪が広がった。そうした友人が、次の住人候補を連れてきてくれたりもした。またひふみ荘の2年目と3年目には、住人のうちそれぞれ2人がひふみ荘を離れ、京都市内に新たなシェアハウスをスタートさせた。いわば「分家」であり、ひふみ荘の住文化がじわりと広がっていった。

### 3.2. 空間の自律的な進化

前述の通り改装は最低限ではあったが、それも住人で協力してセルフビルドで行なった。また共用口座の積立金を使って大型の家具を購入し、共用部は徐々に充実し、姿を変えていった。個室の改装は個々の住人の裁量であり、既存天井を取り払ってロフトを設ける住人や、4畳の部屋をベッドで埋めつくす住人などが現われた。そうした部屋ごとの個性は次に入居する住人へと受け継がれ、また書き替えられていった。最後の1年間には、2階の廊下の壁に色とりどりのペイントがなされた（写真3）。

### 3.3. 解散へ

ひふみ荘は運営者である筆者の転居などの事情により、ちょうど10年の節目をもって一旦解散することとなった。10周年を祝い、別れを惜しむパーティが2019年3月2日に行なわれた。既に遠方に散った人が多いにもかかわらず約半数の17名の歴代住人が集い、ゆかりの友人たちを併せると総勢50名が、再会を楽しんだ。料理自慢の歴代住人が腕を振るい、即興演劇や連歌の会、残った家具の山分け大会などもあり、宴は朝まで続いた。壁には住人の出入りのチャートや思い出の写真、これまでのミーティング資料、買い物レシートが貼り出され、10年という時間が視覚的に提示された（写真4）。

パーティ後、契約終了となる3月15日までの間、徐々に家具と人が減っていく中でもゆかりの人が毎日出入りし、解散を惜しんでいた。

## 4. 考察

筆者はひふみ荘の企画や運営に際して、確たる「コンセプト」は掲げていない。社会的意義やコミュニティの価値を探索することは意識的に避け、ただ自分たちがゆるゆると日常を過ごせる場所をつくりたいとだけ考えていた。あまり気張らず、落ち着いた暮らしができ、かつ自分の居場所だと感じられるような家。

最後のパーティに集まった面々の表情を見るに、この家は35人の住人やその周りの人々にとって、そのような暮らしの上での要求を満たす器となり、そればかりか、自らの記憶が刻み込まれたかけがえのない場所となったようである。場所と人間、そしてそこに時間が畳み込まれることの迫りを感じさせられる。空間が人を呼び、場所となり、そして時間の厚みによって人の記憶がまた場所に刻印され、積み重ねられていく。

筆者の空間への貢献は、不動産情報の中からこの物件を掘り出したことにほぼ尽きるものであり、いわゆる建築設計者としては何もしていない。コミュニティづくりにも億

劫な方である。しかしそれでも、他の歴代住人たちとともに、仕組みをつくったり話し合ったりイベントをしたり、何より自分たちの日常を暮らすことそのものにより、この場所の醸成に関与してきた。かなり広い意味でのデザインを、暮らしを通じて行なってきたと言える。

ひふみ荘は現在大規模な改装をしており（写真5）、秋には新しいシェアハウスとして生まれ変わる。上述のパーティには物件のオーナーと、新しいシェアハウスの設計者、運営者も参加し、新しいひふみ荘への思いを語っていた。培われた風土を引き継ぎながらも、今度は建築設計という新たな翼を得て、また新たなかたちでの10年の歴史がこの場所に刻まれることだろう。

（撮影：三木由也（写真1,3,4））



写真2 家の前での「地蔵盆 BBQ」



写真3 2階の廊下のペイントの様子



写真4 ひふみ荘の歴史の展示



写真5 改装の様子